

「さう」と純一は不思議さうに首を傾げながら、「僕さう思はないけれど。主我にしても、それあ随分大きな、ちよつと普通の人に眞似のできないことなんだらうから。」

「だから純一さんは幸福ですね。姉さんは何うしても然う云ふ風に、あの人を素直に受容れることができないんですから。」

「何うしてよす。」

「何うしてよも。」榮子は語調を強めて、「私だつて、あの人を別に悪い人だとは思つちやゐないけれど、純一さんが思つてゐるやうに、そんな立派な人でもないのよ、實際はね。今に色が剥げなけあ合せだと思つてゐるの。」

「さうか知ら。」と、純一は又首を傾げてゐたが、「誰にしたつて、圓滿なんてことは望めないんですもの。でも、僕はえらいと思ふね。」

「それあ然うですとも。さういふ風に見せかけるだけでもね。榮子は微かに笑つた。

「見せかけで、僕たちの世話は出来ないと思ひますね。姉さんは眞實に森山さんを知らな

いんでせう。」

「さうかも知れないの。さうだつたら大變合せだけれど……。まあ長い目で見てゐませうよ。短日月の接觸で、輕々しく人を批評するのは悪いことですからね。」

そして榮子は、出来るだけその問題から離れようとして、純一の側を立ちながら、

「それは其として、今日はゆつくり遊んでおいでなさいね。御馳走してあげますから。」

「いや……僕もう歸らうと思つて。」

「何ですね、偶に來れば、上るとから歸ることばかり考へてゐて。森山さんも、それあ親切でせうけれど、此處の兄さんだつて、決して貴方のことを忘れてゐるんぢやないのよ。

ただ責任を感じるから、うつかり手を出さないだけのことなんです。」榮子は少し肚立しさうに言ふのであつた。

純一は下を向いて、黙つてゐた。そして爲方なし立つのを躊躇してゐると云ふ風であつた。

やがて榮子は臺所へ出て行つた。

二十七

その晩榮子は純一を須田町まで送つた。別に送る必要はなかつたのであつたが、彼の心

が何んなに森山のために靈感——榮子にはさう云ふ風に思へた——されてゐるかと思ふと、妙に氣持がさつぱりしなかつた。

断片的な純一の話を総合すると、森山の近状もよく判つた。家が七室もあることだの、人を四五人も入れたこと、その中には若い女の事務員もあつて、可也賑かになつた。それから出版業に資金を提供した北海道の船成金の子息だとか云ふ青年が、自分の家のやうに寢泊りをしてゐて森山に師事してゐることだの——

榮子は途々そんな話を聞きながら、一々感心したやうに頷いてゐた。

「そんな人がゐて、純ちゃんは肩身が狭くないこと」榮子は訊いた。

「それあ其の人は——蓮沼といふんだがね……金持の坊ちゃんだもの。金持の家に育つた人は、まあ普通の交際では感じがないね。こせ／＼しませんからね。菊岡なんかと違ふですね。」純一は言ふのであつた。

「何うしてそんなお金出したんでせう。」

純一は直ぐに返辭もしなかつた。

「まあ……その人に取つては、何でもないんでせうと思ふ。それに親達も森山さんを信用

してゐるらしいの。前に家を通出して東京へ来たとき、森山さんが世話をしたんださうです。それからそんな関係できたんだらうと思ふ。だけど、そいつ變な奴さ、學校へも出ないで、毎日バイオリンなんか弾いてぶら／＼してゐるんだよ。ヅキクタアの蓄音器なんかももつてゐるんですよ。」

「贅澤ね。」

「けど森山さんが損すれば其れきりですね。」

「さうね。」榮子は笑つた。

「森山さんがいくら偉いたつて、學校へも出ないで、あんなことしてゐたつて、爲方がないと思ふね。」

「そうでせう」と、榮子も同感した。「だから不思議ぢやありませんか。」

「けどさう馬鹿でもなささうなの。好い藝術家になるかも知れませんか。」

「え、それあ何とも云へないけれど……。」榮子は苦笑してゐた。

そんな打釋けた話を、榮子は初めて彼から聴くことができた。そしていくらか氣が安易になつた。

「森山さんに心酔してゐる譯でもなかつたのか知ら——。」榮子はそんなことも思つて見たりしたが、恩を感じてゐることだけは確かであつた。勿論それは至當であつた。たゞ一番不快に思つたのは、芳野が近頃ちよい／＼緑蔭書房の編輯や森山の書齋へ姿を現はすらしいことであつた。

純一は芳野のことについては、深いことは知らないらしかつた。勿論森山が間へ入つて手を切つたくらゐのことは、承知してゐるらしかつたが、その後何う云ふ徑路を蹈んで、森山と握手することになつたのか、また二人の間には、榮子問題について、初めから何の悪感もなかつたのか否かは全然知らなかつた。

榮子は純一の口から、芳野の名をきいて、ぎよつとした。のめ／＼森山のところへ追隨して行く芳野も芳野なら、それを平氣で受容れてゐる森山も森山だと思つた。

「あの人達の氣が知れない！」榮子は家へ歸つてからも、そのことを思返してゐた。そして二人の交渉は、寧ろ森山の方が主動ではないかと考へた。

「自分——榮子——を失つたことに於て、二人の意氣は投合したのだ」と、さう推察するより外なかつた。

そして然うなると、森山の人と成りが一層疑はれて来るばかりであつた。彼等が共同の利害をもつて、何かしら自分を脅かさうとしてゐるやうに思へてならなかつた。たとひ形に現はして何事をも爲出来さないにしても、それによつて敗北者同士が、自分の勝利を呪つてゐるのだと云ふ氣がしてならなかつた。

純一を何うしても、あのまゝにして置くことはできない。榮子はその瞬間さう思つた。「引取つてからのことは、小野田と相談のうへで何うにでも成る」と、さうも考へた。

「若し小野田が好意をもつてくれなければ、何んなことをしても、自分の手で純一を守立てゝ行かなければならない。」

榮子はその睨いら／＼した氣持の遣場がなかつたので、ちやうど神戸へ行つてゐる小野田に手紙を書いた。

翌朝になつた。榮子は一夜を明すと、いくらか興奮の去つてゐることを感じた。それは現状と妥協しておいた方が得策だといふやうな、緩和された、しかし曖昧なうちにも明かに自己打算の見通すことのできないやうな状態であつた。勿論不決斷と臆病が手傳つてゐたことも争へなかつた。

で、小野田が歸つてから、ゆつくり相談しても遅くはないと云ふことに気がついたので手紙はそのまゝ仕舞つておくことにした。

すると其から物の一週間もたないうちに、榮子は何うしても森山の新居へ行かなければならないことに成つた。

それは純一が病氣で床に就いてゐると云ふ報告を、森山の妹から受取つたことであつた。みよ子の手紙は、榮子に何となく懐しい感じを與へた。森山はとにかく、あれほど眠んだみよ子にまで疎々しくなつたことが、何となく濟まないことのやうに思はれた。みよ子の手紙にも、同じやうな心持を細々と書いてあつた。

……私がちよつとお知らせに上りたいのですけれど、そんな譯で、弟さんの看護や何かで手が足りませんから、手紙でおしらせ致します。兄はもうあの時のことなど、何とも思つてをりませんのですから、何うぞちよつとでも来て御病人を慰めてあげて下さい。お待ち申してをります。

と言ふ風に書いてあつた。

榮子は病氣も氣にかゝつたし、みよ子からの報告だとすれば行かない譯には行かなかつ

た。

「私ちよつと森山さんとこまで行つて來ますよ。」榮子は仕度をしながら、菊岡に斷つた。

菊岡は不思議さうに彼女を見てゐた。榮子は手捷く髪など直してから、帯を締めながら慌忙しい様子をして、書生部屋へ顔を出したのであつた。

「弟が盲腸なんですつて。」榮子はおどろしながら言つた。

「へえ。菊岡は驚いてゐた。」それお御心配ですね。何んなですか。」

「詳しいことは判りませんが、大したことでもなささうなんです。でも、盲腸といへばね。」

「さうですとも。それあ行つていらつしやい。何なら僕も御一緒にいいても可いですが……。」

「いゝえ、貴方にはお留守をしてゐて頂かなければ……。」

「いゝですとも。少しも御心配はありませんから、何うぞ幾日でも……。」

「孰にしても一旦歸りますわ。連れて來た方がいゝか……病院へでも入れるやうだつたら又そのやうにしなければならいせうから。」

「先生のところへ電報うちませう。」

「さうね。でも可いでせう。しばらく見合して下さい。」

そんな話を交へながら、榮子はそこを離れた。何だか泣出したいやうな氣持であつた。勿論行きたくはなかつた。行けば逢つて禮を言はなければならぬし、顔を合すときのことを考へると、厭で／＼堪らなかつた。しかし行かすにはゐられなかつた。

まだしも菊岡が氣を利かして、大急ぎで丁場から俵を呼んで来てくれたので、榮子は遅疑なく出ることができたが、以前の森山とちがつて、多勢使用人などもゐるところへ、悪い身装をして行くのも辛かつた。

榮子は矛盾に充ちた心を抱きながら、いつそう腹立しいやうな氣持で、體を運ばれて行つた。

二十八

あわただしい氣持で、榮子が森山の家へ行つてみると、彼の新居は弟などの口吻によつて想像してゐたほど立派ではなかつたが、しかし前面が木造の洋館になつてゐて、ペンキの塗立で、何か新しい仕事に取かゝつてゐるといふことが、玄關にある多くの下駄や、こたゝ／＼してゐるらしい家の様子で解つた。

「あの人やつぱり何かを仕出來す人だつたのか知ら」と、榮子はその瞬間ちよつと威壓を感じもしたし、森山の得意になつてゐる顔を見るのも不快であつたが、わざとそれを壓つけるやうにして、ベルのポツチを指頭で押すのであつた。

するとつか／＼と其處へ出て來たのが、芳野であつたので榮子はひどく面喰つた。

「やつぱり此の人もこゝへ來てゐるんだ。」榮子は思つた。森山と妥協してゐることが、直ぐ判つて森山の方から、うまく彼を懐柔したに違ひないと思はれた。

「純一を囚にしたうへに、芳野まで味方につけてゐる。」榮子は明かに森山の敵對行動を知ることができたやうに思つたと同時に、森山と顔を合すのが一層不快になつた。

しかし純一の病氣はそれよりも一層氣にかゝつた。で、何んだか早く様子を知りたいと思つたが、芳野の顔を見ると、ちよつと口を利く氣にもなれないのであつた。彼女は啞のやうに點つて、立つてゐた。

「上つたら何うです。」芳野は普通の調子で言ふのであつた。

「は。純一はどこにゐるんでせうか。」榮子も顔を紅くしながら言った。

「奥の六疊に寝てゐるんですがね。」

「病氣はどんなでせうか。」榮子はさう言ひながら上へあがつて行つた。

通りがけに玄關脇の事務室のやうな部屋のなかを見ると、そこに見知らぬ洋服の男と何か連りに話してゐる森山の姿が、ちらと目についたので、そのまゝ通るのも可笑しいと思つて、立停つて挨拶をした。

「どうも御無沙汰いたしました。今日はまたわざ／＼お電報を有難うございました。」

「いゝえ。……。」と、森山は少し狼狽へたやうな風を見せて「まあ何うぞ。後でゆつくりお目にかゝります。」

榮子も「は」と頭を下げた。そのまゝ其處の廊下にある段梯子を上るのであつた。

純一の寝てゐるところは、六疊の明い日本座敷であつたが感心なことには看護婦などを附けて今まで見なかつたやうな綺麗さに室内が整頓されてあつた。

「どうもお世話さまでした」と、彼女は入口まで送つて來た芳野にちよつと會釋をしてから、病床の傍に本を讀んでゐた看護婦にも言葉をかけて、患者の側へ寄つて行つた。

「何うしたの」榮子は純一の顔を覗きこむやうにして言つた。

純一はうと／＼と眠つてゐたところ、人の氣勢に目を覺まされて、薄目を開いて姉の顔を見た。別にさうひどく寝れてもゐなかつたが、目の表情などめつきり鈍くなつて、顔を蒼白めてゐた。

「姉さんですか。」彼はさすがに懐かしさうに言つたが、姉に取つて何んなにか來辛かつたであらうとは、彼も考へてゐたので、氣毒さうに顔を背向けた。

「それで病氣は何んなの。」

「大したことはないんです。軽い盲腸炎ださうです。大變痛んだもんですから……しかし安静にしてゐれば可いんです。」純一はさう言つて、腹部に痛みをでも感ずるらしく、顔を擧めてゐた。

「さう、心配はないの、もう……。」

純一は頷くやうな目つきをした。

「手術するやうなこともないの。」

「え、まあ。これでづつと落着けばそんな必要はないんでございませう。何うしても少し

長引くでせうけれどもね。」温順しさうな若い看護婦が言ふのであつた。

「さう、それならまあ可いけれど……わたし雪報を見て吃驚してしまつたの」と、榮子は漸といくらか安心したやうに言つた。そして其と同時に其前後の事情や、森山や純一の氣持などを知りたいと思つたが、看護婦が傍にゐるので、わざと差控へてゐた。芳野が何うして此處へ來てゐるかなど、云ふことも、榮子には可也重大な問題であつた。

やがて榮子は「私みよ子さんに一寸と挨拶して來ませう。」と言つて病室を出て行くのであつた。

二十九

榮子がみよ子を發見したのは、下座敷の方の五間ばかりの中の一つの落着の好い部屋であつた。新しい机や本箱などがそこにあつて、その机のうへには氣取つたインキスタンドや電気ランプなど置かれ、本箱には新聞の廣告などで見たことのある翻譯書などが詰つてゐた。座蒲團なども此頃の彼女の生活の程度を想像するに足るものであつたが、それにしても室内の色彩は、榮子に何となく不思議な暗示を與へずにはおかなかつた。それは其の

小ぢんまりした部屋の持主が、森山とも、みよ子ともつかないやうな、中間色のものであるからであつた。

勿論榮子は看護婦に案内されて來たのであつたが、うっかり闖入できないやうな氣がしてちよつと入口で躊躇した。それにみよ子が看護婦にさう言はれて、あわて、机の傍を離れようとする様子が、また不思議に榮子の感じを搔亂したのであつた。彼女はそこで手紙か何か讀んでゐたらしかつた。

「あら榮子さん、どうぞ」と、みよ子は顔を紅くして、直ぐ新しい銘仙の座蒲團をそこへ直した。

「お邪魔しても可しいんですか。」榮子も顔を紅くした。

「え、どうぞ……。」

榮子は暫くの間は何だかすつかり様子が變つてゐるので、軽い焦燥を感じながら、そこへ坐つてお辭儀をした。

「今度はまた弟が飛んだ御厄介になりました。」

「いゝえ、ちつとも行届かないんですの。貴女もうお逢ひなすつて？」

「え、今ちよつと。」

「何だか私も吃驚してしまいましたのよ。でもそんなに重くもなくて結構でしたわ。貴女もお驚きなすつたでせう。」

「え、それも可いんですけれど、色々御厄介になつてゐる上に、こんな御迷惑までかけて私お氣毒でならないんですの。」榮子はそれでもみよ子にだけは、可也安易な氣持で口が利けるのであつた。

「いゝんですわ。そんなこと、純一さんが兄の氣に入つてゐるんですもの。」みよ子はにっこりして、「それに今度は家も廣くなつたんですから……。」

「眞實にね。結構ですわ。」榮子は揆つたい感じがしながらも幸福さうなみよ子の顔を、更めてじつと見るのであつた。勿論彼女はいつでも何處でも、幸福さうに暮してゐる女ではあつたが、しかし其には幾分か荒んだ暗い影があつて、暢氣さうではあつたが、ほんとうに希望に充されたものとは言へなかつた。それが今は何となく落着のある、限りない歡喜に浸されてゐるやうで、それだけに又しつとりとした潤ひが、顔の感じなどに出てゐるのであつた。荒いやうな氣分のあつた目にも、みづ／＼した柔味があつた。

今度見つけたらしい女中が、そこへお茶など運んで来て、叮嚀にお辭儀をして行つた。勿論森山は何かは無頓着なやうではあつたが、生活が許すならば、家中を規則づくめに、十分のお上品さと威厳とを保ちたい方の形式家だとは想像された。でも其だけならば別段悪い感じである譯でもなかつた。ただ女中の態度が、ひどくおど／＼してゐるやうで……で又みよ子が單に主人の妹といふよりは、この一家から相當に、寧ろそれ以上にも崇められなければならない人のやうにされてゐるのが、榮子にはちよつと厭であつた。

「お兄さまは仕事をなさるんださうですね。榮子は悦びを述べるやうな氣持で言ふのであつた。

「え、その積りで、こゝへ移つて來ましたの。多分取かゝるんだらうと思ひますけれど、でも未だ分明したことね。」みよ子は微かな聲で應へたが、氣をかへて、榮子の顔に目を据えて、

「わたし随分貴女にお目にかゝりたうございましたわ。秋頃は御旅行をなすつていらしたんですてぬ。暫く。私うらやましく思つておましたわ。」

「さうですか。ほんの暫くでしたわ。」

「小野田さんと御結婚なすつたんですつて？ 私まだお祝ひにも上らないんですけれど……。」みよ子は無雑作にそんな話に觸れて行つた。

「いゝえ。」榮子も寧ろ大膽に彼女の目を見ながら、

「あの時の私の心持のはづみで、そんな事になつたんですけれど、其ために私随分方々から反感を買つてゐるんですの。」とさう言つて、自嘲的に微笑を洩した。

「そんな事ないでせう。お芽出度いことなんでも。でも實際のところ、私貴女を怨んでゐましたの。」

「さうですか。何うしてとせう。」わざと榮子は反問した。

「それも私だけの氣持なんですの。私あの時分、貴女と云ふ姉さんを一人もつことが出来ることばかり思つて、どんなに嬉しかつたか知れないんでせう。」

榮子はそんな風に言はれると、何だか濟まないやうな氣がして、自然に頭が下つた。

「それあ私にも解つてゐますの。芳野さんに對しても、兄が貴女と結婚することを憚らなければならぬと云ふこととらゐはね。そして小野田さんの御結婚は、兄としても豫定の行動を取つたに過ぎないんでせうけれど、それにしても私ずゐぶん残念でしたわ。」

「さうですか。」榮子は機械的に應へたが、みよ子の解釋はちよつと滑稽でもあつたし、不愉快でもあつた。でも此の女にだけにはさう思はせておく方が、双方の幸福だと思はれた多分、森山がそんな風に説明してゐるのだらうとは思はれたが、そんなことは自分としては、さう大した問題でもなかつた。

「その代りに、純一さんを引受けたんだつて、兄がさう言つてゐましたけれど、それにしても貴女何うして、あんまり私の處へ来て下さらなかつたんでせう。」みよ子は詰じるやうに言つた。

榮子はほゝと笑つた。

「別に理由ないでせう、私にだつて……。何となく來にくゝなつたんですもの。」

「何うしてでせう。兄と貴女とのあひだには、十分理解があつた筈ぢやありませんか。」

「それあ然うですけれど……森山さんは何とも思つていらつしやらないに極つてゐるんですけれど、でも私としては餘り平氣でもなかつたんですもの。」

「さう。だつて別に……。兄は反つて、貴女のために悦んでゐましたわ。」

榮子は思はず苦笑させられたが、しかし森山の今の氣分は或ひはさうかも知れないと云

ふ氣もした。純一の世話をするの、自分の想像してゐたのとは、まるで反對で、眞實に博大な好意から出てゐることかも知れないとも考へた。それだつたら自分こそ、ほんとうに卑しむべき邪推と、敵意をもつて彼を見てゐたことを、慚ぢなければならぬ譯であつた。しかし森山がそこまで超越してゐるか否かは疑はれた。すると其處へ森山が、シーリアスな目をして入つて來た。

三十

森山は榮子があわて、蒲團から退るのを見て、「さうして入つしや」と制止しながら、正へ行つて、机の前に坐るのであつた。

「失禮しました。どうも忙しいんでね。」彼は虚心らしく言ふのであつた。

「さやうで入つしやいますか」と、榮子もひどく心苦しうな様子で、然しとにかく自分を失はないだけの落着を以つて引越の悦びなどを述べた。

「ほんとにお廣くて結構でございます。」

「いや、別段廣いといふ譯でもありませんがね」と彼はいくらか照れた風であつたが、

ざと平氣らしく構へて、

「どうせ最初から思ふやうに行かないので……でもまあ、下が編輯室を入れて五室、二階、が上口の三疊と、今純一君の病室になつてゐる六疊と二室ですから、何うにか憊うにか不自由なしに寝起ができるといふ譯です。」

「結構ですわ。」

「何は……純一さんには、逢つて來たですか。——いやなにね、貴女を駭かすほどのことでもないだらうと思つたんですけれど、しかし病氣が病氣ですからね。若し手術でもしなければならぬやうだと、まあ、今の處その心配はなさうですがね。」

「飛んだ御厄介かけまして……。榮子はそれより外に言ひやうもなかつた。

「いやこの位のことは當然のことですよ。」森山は笑ひながら「しかし外の場合とちがつて、何しろ病氣が病氣ですから、ちよつと是で油断がならないのでね、——純一君は、さうも思つてゐないらしいけれど、何うでせう。二三日でいゝですが、傍にゐてやつていたこととは出来ませんか。」

「私でございますか。」

「は、純一君も他人のなかでは頼りがなからうし、看護婦だけでは、不安心ですからね。尤もみよ子もゐますから、決して手が足りないなど云ふことはありませんがね。」

「は、では何ですかお宅へ御迷惑ばかりかけて、私ほんとに心苦しいでございます。」

「何うしてですか。そんな心配しない方がいゝでせう。」

榮子は俛いたきり、術なげな科でゐた。

暫く話が途切れてしまった。

大分たつてから、森山が氣毒のやうな氣がして、榮子は此場の空虚を充すやうに、

「實は小野田も伺ふ筈でございましたけれど少し忙しいものですから……いづれ其のうちは伺ふでせうけれど。」

「いゝえ、私こそ飛んだ御無沙汰で。相變らず忙しいですか。」

「何ですか、思ふやうに運ばないものですから。」

看るとみよ子もゐなかつた。

「しかし好ごさんしたね。」森山は少し間をおいてから、親しそうに微聲で言ふのであつた。榮子は困惑したが、この場合にそんな挨拶も適當だと思つたところで、

悪怯わるびれない態度

で言出した。

「實はそのことで……私共の問題で、ちよつとお目にかゝりたいと思つてゐたんですけれど、折がございませんものでしたから、」

「いゝえ、そのためにわざわざお出でになる必要は少しもありませんがね。私はたゞ貴女の幸福にさへなれば、それで大満足なんですから。貴女本位で、私は總ての問題を解決しようと思つてゐたんですからね。小野田君にも、その點は十分理解してゐてもらはんと、困るんですよ。」

「は、小野田は別に何とも……」

「それなら好いんですがね。何うか仲好く暮して下さい。勿論小野田は、私も長く附合つてゐて知つてゐますが、決して貴女の期待を裏切るやうな男ぢやありませんよ。あの男も是迄随分寂しい日を送つて來たのですから、貴女に取つては尙更幸福でせう。あの男の書くものも、これからはつとして來るでせう。いつかの作は何うなりました。」

「あれは出來あがりましたの。まだ實演はされませんが、俳優の都合とかで……。」

「それで又何かやつてゐるんですか。」

「は、一〇二の書きたいものがあるとか言つてゐるんですけど、何だかこの節は、芝居がまた逆行するやうな傾向で、面白くないから、當分書く氣がしないなぞと、そんなことを申してをります。迎合のできない性分らしいんですから。」

「さうですかね。ちや今のところ何にもしないで？」

「いゝえ、舊の新劇團の復活相談が持上つてゐますので、體が忙しくなるとか言つてゐます。」

「それぢや爲方がないですが、私もこんな仕事を初めたものですから、若しできることなら閑があつたら少し助けてもらはうと思つて、そのうち行くつもりだつたんですがね。」森山はそんな事を言つてちよつと得意の色を示しながら、

「それに未だお祝ひをしないんですからね。それも何か私の好意を表するだけのことはするつもりで……が、何分忙しいので……これも勧められて初めたことなんです。」

「結構でございますわ。」

「いや、まだ海のものとも山のものともつかないんですが、貴女はたしか逢ひませんでしたね、前から私の處へ出入してゐた男に、秋山といふ青年があるんですが……。」

「いゝえ、存じません。」

「實はそれの仕事のやうなものです、全權は私が握つてゐるので……それも、切つても切れぬ因縁があるので。」そして彼はちよつと言を流ませたが、微聲で、

「みよ子から何か聞きませんでしたか。」

「伺ひませんでしたか……。」

そこへみよ子が、菓子をもつて戻つて來たので、その話はちよつと腰を折られてしまつたが、榮子には大體その内容がわかつてゐた。

榮子は森山との會見が大體に於て、思つたほど悪い氣持でないことを感じた。何だか前よりも一層の親しさで、兄妹が自分を迎へてゐるやうにも感じられた。たとひ森山としてはそれが自分の體面を保つうへに於て尤も懶功な遣方で、そして又さうでもしなければ、彼は氣がすまぬのであらうとは想像されるにしても、そんな風にして今迄の厭な感情を一掃することが出来るものなら、それほど悦ばしいことはないと思つた。それを輕蔑したり、お互に氣持を探り合ふやうなことをしてゐるのは、詰らないことだと思つた。さうは思ひながらも、何だか急に拍子ぬけのしたやうな氣分の弛びと淡い寂しさが感ぜられて、と

れから又双方の交渉が、偽善と虚飾とでつよくであらうことが餘り好い氣持ではなかつた。

三十一

榮子はその翌日の夜の十一時頃まで、純一についてゐた。その日小野田が突然歸つて來たと云ふ電話があつたので、一旦歸ることになつた。

森山では、別に心配はないと思ふけれど、病人のために少し來てゐてもらつた方が可いと言ふので、それに夜分になつてから、又熱が少し上つたりなどして、純一自身は口へ出すのを憚つてゐるらしかつたが、姉に歸られることを、ひどく心細がつてゐるやうに見えた。

「今夜は一旦歸つて、明日出直して來ませうか知ら。」榮子は蔭でみよ子に言つた。

「さうね。それでも可いけれど。」みよ子も決定的には言へなかつた。

「芳野は泊つてゐますの、お宅に。」榮子はそつと訊いてみた。

芳野はどこにゐるのか、有繫すがに姿も見せなかつたが、多分事務室にゐるらしく想像された。

「え、さうなんです。」

「ぢや森山さんの御厄介ものね。」榮子にはやりと笑つた。

みよ子もにやりとなつた。

「よく來られたものね。」

「でも外に行くところがないんです。それに、あんな調子ですから、外交員にはいゝんださうです。來た日から、そんな相談が纏まつたらしいんですの。」

「芳野さへゐなければね。」榮子は顔を擧めながら言つた。

「かまはないでせう。」

とにかく榮子は其事を斷り旁々、今夜は歸ることにした。その事を純一に斷ると、彼も黙つて點頷いてゐた。榮子は氣にかゝつたが、しかし小野田に報告する必要もあつた。

「早かつたら、今夜のうちに來られるかも知れませんが。」

榮子はさう言つて、出て行つた。幾分落着きはしたやうなものゝ、何だか頭腦かみが混亂してゐた。

小野田はもう寝てゐたが、榮子が部屋へ入つて來たので目がさめた。

「たゞ今。榮子は枕許へ来て手をついた。

「何うだったの。」小野田はちよつと榮子の顔を見ながら訊いた。

「大したことでもございませんけれど、何しろ盲腸ですから油断はできないらしいんです。でも森山さん好くしてくれてゐますの。看護婦も傭つてくれて、二階の一室を病室にあてて、私極がわるくて爲方がなかつたんです。」

「ふむ。」小野田は呻吟くやうに言つたが、少し起上つて、

「で、何か話があつたのか。」

「別に何にも……たゞ、私が當分行つてゐなければならぬかも知れませんの。放抛つてもおけないでせう。」

「それあ然うだ。今夜は歸るまいと思つてゐた。」

「でもお断りしようと思つて。そして貴方さへ心持がわるくなかつたら、少時行つてやろうかと思ふんですが……行きつきりでないまでも、夜がやつぱり大事ですから。」

「それあ可いさ。お前さへあの家に居辛くなければ……。」

「居辛くないこともないんですけれど、森山さんも妥協的態度に出てゐますから。」

「どんな風なんだ。」小野田は苦笑しながら訊くのであつた。

「別に何でもないんですの。私たちが仲善く暮すやうに……若し、貴方にお願ひできるところとだつたら、少し助けてもらひたいなんて、そんなことを言つてゐましたわ。」

「ふん。あの男としては、然ういふ風に出るより外ないだらうね。しかし好い氣持ちぢやないだらう。離れてゐるよりか、接近してゐる方が、まあ安心だからね。しかし矢張り離れてゐた方がいゝんだよ、少なくとも當分はね。」小野田は言ふのであつた。

「それあさうね。ぢや、行つちや悪いでせうかね。」

「しかし病人を放抛つておく譯にもいきまい。」

「わたし芳野がゐるんで、眞實に厭なんですけれど。」

「やつぱり然うか。」

「尤も知らない顔をしてゐれば、何でもないんですけれど。」

それから榮子は、森山の新居や、新生活について印象的に少しく話してから、

「あれは何とか云ふ……さうく秋山とか云ふ富豪の坊ちゃんね。その人とみよ子さんが一緒になつてゐるに極つてゐるの。私さう思ひましたわ。」

「うむ、悪いことをするな。」小野田は唸るやうに言ふのであつた。

「その坊ちゃんの仕事なんです。其にしてもさう云ふ青年を惹着ける力を、あの人がもつてゐるのが感心ね。」

「そのくらの事はね。しかし今に判げてくるよ。仕事だつてさう巧く行きやしないからね。その男を見た？」

「いゝえ。田舎へ歸つてゐるらしいんです。しかし成功しないとも限りませんわね。」

「何だか危いもんだね。成功すれば、それに越したことはないけれど。」小野田は呟きながら、「それにしても、純一君の病氣が、妙な動機になつたもんだね。お前がまた森山のところへ行くなんて。」

さう云ふ氣分は、いくらか不愉快さうであつた。

榮子は俛いてゐた。

「お前も妥協して來たんだらう」彼は詰るやうに言つた。

「だつて爲方がないんですもの。」榮子も少し氣を悪くした。

結局二人の感じはお互に好くなかつた。

三十二

純一の病氣が恢復期に向つて行くまでには、ちよいと手間が取れた。

榮子は恢復してからの純一の處分についても、二度目に家へちよいと用達し旁々歸つたとき、小野田に相談したのであつたが、小野田の言ふのでは、それは純一の自由に委したら何うかと云ふのであつた。

「その方が好いでせうか。私もそんな氣はしてゐるんですけど、其では何だか私が森山さんに一生頭が上らないやうな氣がするんですけど。」榮子は言ふのであつた。

小野田は別に自分を主張もしなかつた。

「さうかな。お前の氣象としては、それあ然うかも知れんね。さうまでして、森山の氣をわるくすることもないぢやないかな。」

「さうね。」榮子も思案に餘るといふ風であつた。

「どうも難しい問題だね。お前獨りの氣持を潔よくしたところで、純一君までお前のために殉死させるやうでも可哀さうぢやないかね。」

「ぢや、森山さんのところにおいた方が、純一の利益だとお考へになるの。」

「いや、物質上のことね、僕だつて敢て負擔を辭さない積りさ。しかし純一君が森山君に心服してゐるのに、強ひて引放すのも何うかと思ふ。」

「え、だけれど心服と云つたところで、何もさう深い……是非森山さんでなければならぬと云ふ、内面的のもんぢやなさうよ。」榮子は言ふのであつた。

「さう難しく云ふ必要もないやうだな。何も森山に生涯師事する譯でもないんだらうから……。」

「けれど私と森山さんの關係や何かから、今に心苦しく感じてくる時はないでせうか。」

「それあ今だつて感じてゐる譯だらう。森山に同情してゐるんだらう。姉さんは叛いても、自分だけでも森山に附いてゐてやりたいと云ふような……。」

「え、だから私も苦しいんです。」
いくら言つても、その問題は解決はつかなかつた。で、病氣が癒つてからのことにしようといふことに決つた。

そして榮子は、それから二週間の餘も、純一の傍にゐたのであつた。病氣は危険ではな

かつたけれど、捗々しく行かなかつたが、でも此頃では、軀が動かせるやうになつて、少しくらゐは歩けるのであつた。

純一はもう、「五六日も前から姉さん歸つてもいゝ」など言つてゐたが、しかし置いて行かれては矢張寂しさうでもあつたし、森山も「差間がなかつたら、もう少し……。」と引留めるので、榮子も振切つて歸るに忍びなかつた。それに自分の心持を能く純一が理解してくれ、森山も承認するなら、可成連れて行きたいと思つてゐるので、その話をするには純一の健康に確信が出来てからの方が好いと思つた。

或日のことであつた。外はもうぼか／＼した陽氣で、上野あたりの櫻もそろ／＼散りかける頃であつた。純一は病床に飽き／＼したと云ふ風で、縁側へ出て、淡濛霧にぼかされた長閑な空を眺めながら、日に／＼健かさを増してくる若々しい生活力の恢復に、限りない歡喜を感じてゐた。

榮子は今日か、遅くも明日あたりは家へ歸らうと思つてゐるので、押入に仕舞つてあつた自分の着物などを整理してゐた。持つてこない積りでも、いつの間にか一梱ほどたまつてゐた。」

「姉さん今日帰りますか。」純一は更まつた調子で訊いた。

「私？」と、榮子は振願つて、「さうね、今日はお午後ひるかちでもお暇をいたゞかうかと思つてゐるんですが、純一さんの都合は何う？」

純一は寂しい微笑をたゞへてゐた。

「僕の都合なんか何うでも可いんです。」

「それあ然うですけれど、此間もちよつと話の出た貴方の問題ね」と、榮子は部屋の外へちよつと氣を配るやうにして、「あれは何うしますか。矢張つと此方にゐますか。其とも私の家へ來ますか。」

純一は困つたやうな顔をした。

「それあ此方にゐたいと思ふなら、森山さんもあゝ言つて下さるんだから、わたつて介意ひはないんですけれど、森山さんの金主が蓮沼さんであつてみれば、森山さんを通して、貴方は蓮沼さんのお世話になるやうなものだからね。」榮子は暗い目をして言つた。

純一は何とも言はなかつたが、姉にさう云ふ風に言はれてみると、餘り好い感じがしないのであつた。

それは蓮沼と云ふその青年は、純一が病氣で倒れる少し前に、ふらりと一人で郷里へ歸つて行つた。それも一週間ほどで歸つてくると云ふ話であつたが、もう一月の餘にもなるのに、未だ歸つてこなかつた。それは純一と直接關係のないことのやうではあつたが、蓮沼の消息の絶えてゐることが、彼の結婚することになつてゐるみよ子は勿論のこと、森山自身にも、相當不安な感を與へる理由があるのではないかと云ふ氣がした。勿論純一は蓮沼と深い話をしたこともなかつたが、でも誘はれて一緒にカフェーなどへ行つたことがあつて、何の蟠りもない、自分などから見ると、生活意識の分明しないやうな、沈鬱な青年だといふ氣がした。しかし純一は、彼の歸りのおそいことについては、森山などと同じやうに、この頃少し疑惑を感じて來た。若しかすると蓮沼がみよ子との結婚について、親達と衝突してゐるのではないかとも疑はれたし、多分出版の資金が調子よく送られて來ないので、その話に行つたけれど、それにも何か故障ができたのではあるまいかと云ふことも氣遣はれた。見え坊の森山はそんなことは仄にも出さなかつた。が三四日前の夜のこと、みよ子が病室へ來てしばらく話してゐるうち、彼女の口吻でちよつとそんな暗示を與へられたこともあつた。

しかし純一は森山を信じてゐた。そんな事で急にへたばるやうな彼ではないと思つてゐた。

三三三

「それに肝腎の蓮沼さんも、歸つてこないんですからね。」榮子は呟いてゐたが。

「ほんとに何うします。今のうちなら、小野田に純一さんを頼むのに、大變都合がいゝの。」

「さう？ それなら其でいゝけれど、……かう言ふと、純一さんは怒るか知れないけれど、私貴方の前途を氣遣ふから、さう言ふの。それお小野田の義兄さんだつて、収入が澤山ある譯ぢやないんだから、純一さん引受けさせると云ふのも、ちよつと氣の毒なのよ。しかしあんな人ですから、さうおせつかいはしない代りに、爲るだけのことはするのよ。」榮子は言ふのであつた。

「こんなこと言つちや悪いけれど、森山さんのお仕事といふのも、蓮沼さん次第らしいのよ。それお蓮沼さんの田舎は、大財産家ですから、お金も出るでせうけれど、今朝も茶の室でみよ子さんに聞いたところでは、蓮沼さんの田舎でも、お父さんの銀行が、大變苦しくなつてゐるんですつて。」

「蓮沼銀行？」

「え。」

「そんなこと知らんけれど、……僕は森山さんが行けと言へば行くし、居ろと言へば居るんだ。」

「さう。けど、その時機がですよ……。」

そんな話をしてゐる處へ、森山がひよつこり顔を出した。

三十三

森山は榮子が疊んだ着替などの始末をしてゐるのを見て、驚いたやうに、

「貴女もうお歸り？」と言ひながら、彼女を見てゐた。

「え、純一もお蔭で大分よろしいやうですから、そろ／＼お暇にしようかと思ひまして。」榮子は答へた。

「さうですか。まだ二三日いゝでせう。」

「でも、随分お長くなりましたわ。」

「さうですかね。小野田君も、世話の爲手がなくて、困つてゐるかも知れませんから、それではまあ。ぢや、今晚歸りますか。」

「え。さうさせて戴きたうございます。」

「それは貴女の自由ですよ。」森山は苦笑しながら、縁側へ座蒲團を持出して、日光に當つてゐる純一の側へ来て坐りながら、

「何うだ、大分血色が出たぢやないか。時候は好いし、病氣は恢復するし、これから幸福だね。」

純一は笑つてゐた。

三十三

「眞實に好うございました。皆さんで心配していただいたので、大事にもならなくて……。」

「しかしこの病氣は、なか／＼油断ができないさうだから、眞實に言ふと、豫後は温泉か海岸へでも行くと可いんだがね。」そして森山は急に思ひあがつたやうな調子で、

「いや待ちたまへ。事によつたら、行けるかも知れないよ。どうだ、二週間ばかり何處か静かな處へ行つてゐては……。」

純一は、「え」と言つたきり、俛いてゐた。

「それまでにして戴きませんが、後を氣をつければ大丈夫でございます。そんな身分ぢやないんですもの。」

「いや、しかし健康が大切です。何事をおいても、驅だけは丈夫にしておかなければ、これから思切つた勉強ができません。幾許もかゝるんぢやないんだから、一つ行くことにしよう。」そして彼は榮子に向つて、

「何うです、金のことなど、失禮ですが僕が引受けますから貴方も一つ附いて行つては。」

「は、有難ございます。」榮子は好い加減に軽く受けながら、

「それよりも私、純一がこんなにお世話になるのが、誠に心苦しいんでございますの。」

「何うしてよす。」

「でも純一は當然小野田に引受けてもらふべきものだらうと思つてゐますから。」

森山はちよつと不快の色を浮べた。

「それは貴女自身の心持の問題でせう。貴女がそんなに心苦しく思ふなら、純一君は小野田の方へ行つてゐても好いですがね、しかし其程にする必要もないぢやありませんか。」

「さうでせうか。」

「失禮ですけれど、純一君の一身は僕が引受けて、きつと物にして見せますよ。」

「さう仰やつて頂くのは、大變有難いんでございますけれど……。」

「やつぱり氣が濟まないと言っても言ふんですか。それとも僕の傍においては、不安心だと言ふやうに……僕を信用しかねると云ふやうなことでしたら、それならば爲方がありません。純一君に小野田の方へ行つてもらひます。」森山は彼としては希らしいほど、妙に興奮した調子で言ふのであつた。

「いゝえ」と榮子は紅くなつて、「決してそんな意味ぢやないんでございます。」

森山はそれを聴きつけない風で、少し嚴かな表情になつて、

「今貴女のお言葉で想出したのですが、私はどうも貴女方から誤解されてゐるやうな氣がしてならないんです。」

「まあ」と、榮子はわざと吃驚したやうな様子をして、「それは何んなことなんでございませうか。」

すると森山は遽に色を和けて、

「いや、それは然し何でもないんです。氣にしちや可けませんよ。」

「いゝえ、別に氣になぞかけやしませんけれど、何か貴方に御不快なことでございますならば……。」「榮子は謹嚴な態度で言ふのであつた。

「それも何れ折を見て、お話しても可いですが、然しさう氣にする程のことぢやないんです。」

「でも何だか氣持が悪うございますから。」「榮子はそれを聴かなければ、承知しないと云ふ態度を示して言ふのであつた。

「困るよ、さう貴女のやうに眞剣になられては。」

「え、私こんな性分でございますから、そんなことでも仰やられると、其の理由を伺ふまでは、氣になつて爲方がないんでございます。何んなことでも、曖昧にしておくと言ふことが、誠に氣持がわるいんでございます。」「榮子はそこに純一のあることを忘れたやうに、ときばき言ふのであつた。勿論純一にも十分聴しておかなければならないのだと云ふ氣持のあつたことも争へなかつた。

「私がおか、貴方に對して誤解を抱いてゐるやうですと、それこそ眞實にすまないことなんですから。」

「けれどもですね」と、森山も緊張した口調になつて、「それは貴女としては貴女の感情の動くまゝに行動してゐたことかも知れませんが、私としては随分意外だつたのです。」

榮子は森山のさうした態度を見ると、一層膽がすわつたやうになつて、蒼白い顔をして彼の一語をも聴洩すまいと云ふ風に、落着いてゐたが、森山がそれきり言葉を途切らせてゐるので、更に、

「何う云ふことなんでしょうか、其は。私が小野田の處へまゐつた事を仰るんでございませうか。」

「勿論その事より外に、何等の問題もありやうはないんですがね。」森山は冷笑の色を浮べたが、遽に氣がさしたやうに、

「しかしその話はまあ止しておきませう。純一君が聴いても餘り好い氣持はしないですからね。」

「それも然うでございますね」と、榮子も寂しい微笑を浮べたが、

「ですけど、私としましては、純一にも聴いてゐてもらつた方が、却つて宜しいんでございませう。」

「ほう、それは何うしてですか。」

「私から申しませば、純一も少し私を誤解してゐるやうに思ひますから。」榮子は森山に當つけるやうに言ふのであつた。

「何んな點で？」森山は殆んど機械的のやうに訊いた。

「つまり……」と、榮子は少し顔を紅く染めながら、「つまり私が小野田と同棲することになりました事は、貴方に對して私が大變忘恩的なことをしたのだと云ふ風に、純一は思つてゐるんでございます。——外面的に見たところでは、まあそんな風に解釋されないこともないんでございます。散々貴方のお世話に成りながら、貴方に叛いたやうな形になりましたのですから、しかし其れこそ皮相の見なんでございます。」

「皮相の見ですか」と、森山は皮肉らしく言つて笑つてゐたが、暫くしてから、

「それは貴女のあの時の心持の推移が、何うあつたか、それを詮索してみなければ解らないことですが……。」

すると榮子はその言葉の終るのも待たないで、

「それこそ極單純なんでございます。詮索しなければ判らないと云ふほどの複雑な心理的

推移があつた譯でも何でもありません。」「しかし其ならばですね、小野田君に紹介したのは私でせう——。」「え。」

「勿論それは眞の形式的のことぢやないかと言はれれば、それ迄のことですけれど、しかし私としては随分不愉快だつたのです。若しも貴女が——いや小野田君もですが、私に一言そのことを断つてくれれば、私は悦んで貴女方の同棲に賛成したぐらうと思ひます。」「では、つまり貴方の承認を経なかつたのが、悪いと仰やるんですか。」

「いや、悪いとか好いとか言ふんぢやない。たゞ不愉快だと言ふに過ぎないんですが、しかし其と同時に、私は貴女方のために随分莫迦にされたと云ふ感じがするのです。」

榮子は面を伏せて、心苦しうに黙つてゐたが、良久あつて、

「さう云ふ風に、貴方に不愉快な感じをおさせたことは、私もすまないと思つてゐました。それは私から幾重にもお詫を申し上げますが、しかし私としましては、あの場合貴方にまでそれをお断りする勇氣がなかつたのでございます。又さうすることは、決して貴方に對する私の禮儀でもないだらうと存じましたのです。」

「何ういふ理由で？」

「その理由をお聴きになつては私困ります。私はたゞ然う感じただけなんです。事によると、其が私の淺果敢な邪推であつたかも知れないのでございます。」

「ふむ」と、森山は、暗い表情をして、暫く考へ込んでゐたが、

純一は困つたやうな顔をして、じつと聽いてゐた。そして其の時みよ子がひよつこり顔を出したので、二人の話はふつり切れてしまつた。

「お兄いさま」と、芳子はいくらか氣取つたやうな風で、

「榮子さん今日お歸りになるの。」

「歸るんだつて。」

「まあ、可いちやございませんかね。榮子さんが歸つておしまひなされると、急に寂しくなりますわ。」

「長々御厄介になりましたね。ほんとに何かと御迷惑ばかりおかけして。」

「いゝえ、ちよつとも行届きませんで。」

「まあそんな事は何うでも可い。既に何か御馳走しろよ。純一君の本復祝ひ旁々だ。お別

れの晩餐會をやらう。」

「さうね。それも可いでせう、みよ子は嬉しさに言ふのであつた。」

三十四

その晩少し早目に開かれた晩餐會には、別にこれぞと云ふ御馳走もなかつたけれど、みよ子が一生懸命に臺所で拵へたものばかりで、氣持はよかつた。森山は西洋料理がよつたものが好きなので、バターやヘットでいためたやうな物が多かつた。白い卓子被をかけた餉臺の眞中には花が飾つてあつたり、菓子や果物が盛られたりしてあつた。

榮子は辭退したのであつたが、みよ子が氣を悪くするので、餘り氣の進まないのを、力めて御馳走になることになつた。勿論別にさう不愉快といふほどではなかつたにしても何となく心苦しかつた。この頃の森山の生活は勿論、みよ子などの衣裳なども、一ト頃から見ると可也贅澤で、見たことのない指環なども彼女の指にちかくしてゐるのであつた。森山と云ふ男が悪氣のない人間であることは、榮子も十分知つてゐたし、無意味にさうやつてゐる譯でもないのであつたが、しかしそれらの負擔が總て蓮沼にかゝつて來るのだと思ふと、不愉快であつた。

「芳野君は何うしたの」などと、森山は食物を運んでゐるみよ子を振顧りながら言つた。

「え、今さう言ひました。」みよ子は答へて、純一のために特につた柔かいものを、彼の前に並べてゐた。

「蓮沼もゐると可いんだがな。あいつ何をぐづくしてゐる。」森山は呟いてゐた。

「眞實ね。あの人暢氣で爲様がないのね。」みよ子はじれつたさうに言ふのであつた。

「葡萄酒如何です」と、みよ子は榮子や純一の前に用意されたコップに、葡萄酒を注いだ。「こんなに御馳走なすつちや困りますわ」と、榮子は目眩さうな目をして、手帛で口のはたを抑へてゐた。先刻森山と、思ひがけなく言争ひをしたあとなので、そして其が解決もつかずに其儘になつてゐるので、何となく胸が痞へてゐるやうで、氣分がせい／＼しなかつた。

のみならず芳野まで列席するらしいので、彼女は何となく不安を感じた。別にさういふ意味の晩餐會でないことは、十分わかつてゐたが、しかし彼等に對する自分の位置を思ふと何となく安かではなかつた。勿論今夜初めて芳野に逢ふわけではなかつた。暫くこゝに

ゐる間に、時々顔の合ふ機會はあつた。芳野も病室へ入つて來たし、彼女も彼を迎へない譯には行かなかつた。そしてそんな時の芳野は、不斷の調子と少しも變らなかつたが、榮子は妙に憂鬱な氣分に襲はれがちであつた。彼が森山の下に働いてゐるのが、不快でならなかつた。

「とにかく早く切揚げてしまはう。榮子はさう思ひながら、慎しやかに箸を執りはじめた。そこへ芳野が入つて來たのであつた。

「こちらへ來たまへ。」森山は榮子と向ひ合つたところに明けてあつた席へ、彼を坐らせようとした。

「やあ、しかし……。」と、芳野は困惑の色を浮べながら、「何だか、餘り高いんで……。」

「いゝぢやないか。」と森山は叱るやうに言つて、「過去つたことなど、水に流してしまつたら可いぢやないか。憎まれ役を勤めたのは、僕なんだから、今夜は更めて、……小野田君の細君として、君も榮子さんのために、お祝ひを言つたら可いぢやないか。さうすると僕も非常に氣持が好い。」

「でも少し慘酷だな」と、芳野は笑談らしく言つて、笑ひながらそこに坐つたが、妙に照

れてゐた。

森山は彼にウキスイを注いでやりながら、

「けど一番割の悪いのは、僕なんだからね。君からは何か僕が榮子さんを挑發したやうに思はれるし、榮子さんからは、僕に野心があつて君を驅逐したやうに思はれるし。」

「僕はそんなこと思やしませんよ。」芳野はウキスイを苦さうに一口飲みながら、「總て僕の悪いことは十分知つてゐたんですから。」

「さうでもなささうだね。あれから僕の家へ足を絶つたところを見ると」と、森山はわざとらしく笑ひながら、

「勿論僕は、榮子さんに満腹の同情を寄せてゐたからね、若しも小野田といふものがなかつたら、僕と榮子さんは餘程危かつたね。少くとも僕は……。」森山はさう言つて、空虚な聲を立て、笑つた。彼は二杯ばかりウキスイを吐へ注込んだらしかつた。

榮子は熱心に聽耳を立て、ゐたが、森山が苦しい辯解をしてゐることが、見えすくやうで可笑かつた。けれど彼の立場としては、さうでもする外ないのだらうと思はれた。

すると芳野も熱したやうな、しかし潤んだ目を光らせながら、

「貴方のことは僕は知りません。しかしあの時の榮子には、確にそんなところがあつたやうです。ねえ、榮子さん！」芳野は皮肉らしく言ふのであつた。

黙つて聞いてゐた榮子は、「いゝえ」と分明した調子で言つた。

「それは貴方がたの誤解です。確に誤解なんでございます。私は森山さんにお縋りして、貴方から解放されたい一心でございました。あの時のことを掘返すのは、厭でございますけれど、其には貴方も賛成して下さいましたのです。寧ろ賛成以上にも、先生の態度は積極的だつたのでございますから。」榮子は激越しがちな感情を、壓へくするやうに言ふのであつた。その目には涙がたまつてゐた。

「それも貴女の幸福を思つたからです。」森山も壓つけるやうに言つた。

「それは然うなんでございましたでせう。其ことは私も感謝してをりますけれど、今仰つた先生と私の心持が危機に臨んでゐたといふことは、全く森山さんの誤解でございます。」

「多分さうでしたらう。」と森山は苦笑をたゞへながら、
「しかし後になつてみると、双方の誤解であつたことが初めてはつきり解るので、その時はそれに氣着かないのです。貴女はあの時分、何ものにか取纏つて自分を生きようとして

ゐましたな。それが戀愛だか何うか知りませんが、まあ然う言つたやうな形式で、すね。今になつて、貴女の心持が怎うであつたとか、あゝであつたとか言つてみたところで、痕迹のないことですから爲方がありません。しかし少くとも私にはさう感ぜられたのです。」

「だつて先生」と榮子は調子を和らげるために、わざとそんな敬語を使ひながら、「芳野と手を切つたばかり、私が尊敬してゐる先生にそんな感情が持得るか何うか……私決してそんな奔放な女ぢやございませんもの。」

「しかし貴女がそれほど尊敬してゐる私を除外して——寧ろ美事に蹴散らして、小野田君へ行つたのは、随分思切つた行動ぢやないですか。と、まあ然う言はれても、爲方がないかも知れませんね。」

「けれど、それも私が先生に反感をもつたからなんでございます。」榮子は蒼白めた顔をして言ふのであつた。

芳野はぐいぐウキスキイを飲んで、感傷的な表情をして軀を揺すつてゐたが、顔が遽に至んで來た。そして泣くやうな笑ふやうな聲をして叫出した。

不快だ。實に不快だ！もうその話は止して下さい。僕は實に判断に苦しむ。寧ろ何にも聴かしてもらはん方がいい。」

「芳野としては、不思議に沈痛な調子を帯びたものであつたので、森山も榮子も遽に反省を促されたやうに、びつたり黙つてしまつた。そして其と同時に、折角の宴席が忽ち白けかへつてしまつた。」

「純一も泣面をかくやうな顔をして、悄々と自分の部屋へ歸つて行つた。」

「さあ純ちゃん、あなたもお出でなさい。」

「榮子は暫くすると、蒼白めた顔をして、さう言つて病室へ入つて來た。」

「純一は疲れて床に横はつてゐたが、遽に起あがつて、物に怯えたやうな姉の顔に見入つてゐた。」

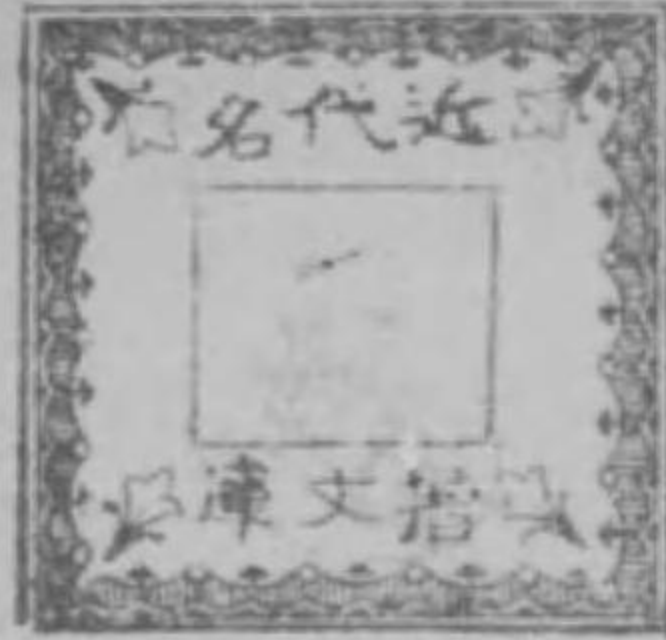
「さあ純ちゃん、貴方こんな處にゐて、不愉快ぢやないこと？私今俾をさう言つて來ますからね、仕度をおしなさい。」榮子はさう言つて、あわただしく部屋を出ようとした。

「純一は何うして可いか解らなかつた。勿論森山の今夜の態度で、今迄の彼に對する崇敬

の念が何となく裏切られたことだけは確かであつた。同時に今迄の姉の態度にも、可成根づよい理由もあることがわかつたやうに思つたが、それかと言つて、自分に對する森山の好意も蹂躪るわけには行かなかつた。」

「姉と弟とはその事について、しばらく争つてゐたが、つまり榮子は弟の理由を認めない譯に行かなかつた。(完)」

感々たる文だ



の も る 出 崩

大正十二年二月十四日發行

定價五拾錢

著者 德田秋聲

發行者 松岡虎王

印刷者 福原貞次

東京市牛込區原町一丁目二十一番地

發行所 近代名著文庫刊行會

發賣元 南天堂書房

本郷區駒込東片町一〇五番地
振替東京二五五〇七番

(刷 印 堂 華 文)

各册定價—近代著名文庫—金五拾錢

<p>文學博士 幸田露伴著 (第一篇)</p> <p>努力</p>	<p>室伏高信著 (第二編)</p> <p>社會主義批判</p>	<p>正宗白鳥著 (第三編)</p> <p>二階の窓</p>	<p>トルストイ原著 (第四編) 操譯</p> <p>懺悔及内面生活の發展</p>	<p>文學博士 波多野栴一序 文學士 佐藤繁彦譯 (第五編)</p> <p>宗教生活と哲學</p>
<p>文學博士 坪内逍遙著 (第六編)</p> <p>舞踊論</p>	<p>ドストエーフスキイ原著 (第七編) 木村信次譯</p> <p>貧しき人々</p>	<p>近代詩研究会編 (第八編)</p> <p>近代名詩選 第一 (三册完結)</p>	<p>徳田秋聲著 (第九編)</p> <p>萌出るもの</p>	<p>杉森孝次郎著 (第十編)</p> <p>神になる意志</p>

389
82

12.3.31

終

